

洪水

詩と音楽のための

第十三号

特集

松平頼暁「What's next?」

責任編集……松井 茂

川崎弘二／川島素晴／石塚潤一／中村和枝／松平 敬／有馬純寿
中ザワヒデキ／大木裕之／伊村靖子／福井とも子／田中吉史
木下正道／鈴木治行／平田俊子／田中 槐

シリーズ

詩で描く新世紀地図5……阿部日奈子

interview

清水 茂 聞き手 小島きみ子

執筆

篠原資明
宇佐美孝二
長津功三良
三角みつ紀
田中健太郎
酒見直子
中川俊郎
山崎美穂
井上郷子

嶋岡 晨
たなかあきみつ
國峰照子
馬場駿吉
神泉 薫
玉城入野
吉田義昭
海埜今日子
望月苑巳

野樹かずみ
南原充士
八覚正大
佐川亜紀
蝦名泰洋
南川優子
津田於斗彦
池田 康

Kozui
2014
Winter

詩 ...02

篠原資明／宇佐美孝二／長津功三良
三角みづ紀／田中健太郎／酒見直子

spiralviews 瀧口修造残像3拾遺

馬場駿吉「方寸のポテンシャル-6」 ...132

原点の詩 ...98

清水茂／聞き手=小島きみ子

Crazy Bard Airing ...128

國峰照子

VERSE BEYOND ...124

ベラ・アフマドゥーリナ／たなかあきみつ訳

DRIFTWORD ...97

特集

松平頼暁「What's next?」

責任編集=松井 茂 編集協力=川崎弘二

インタビュー「はみ出した音楽から、よりはみ出るための思考」...22

聞き手：松井 茂

論考……川島素晴／石塚潤一／中村和枝／松平 敬 ...30

松平頼暁「音楽における言葉の役割」より抜粋 ...39

講演録「日本の電子音楽の歩み Expo'70から現在のコンピュータ音楽まで」...52

聞き手：有馬純寿、構成：川崎弘二

エッセイ……中ザワヒデアキ／大木裕之／伊村靖子／松井 茂／

福井とも子／田中吉史／木下正道／鈴木治行／有馬純寿 ...55

詩……平田俊子／田中 槐／松井 茂 ...66

作品表・ディスクリスト（横組、頁逆行）...81

音楽はうごく ...86

山崎美穂『光のない。』『ゼロ・アワー』三輪真弘の音楽による舞台芸術作品

中川俊郎 **coconi utao** ⑤ ...82

井上郷子 蔦に鳥、花に蝶、音楽に… ...92

第4回〈ゲルハルト・シュテプラー&クンス・シム〉

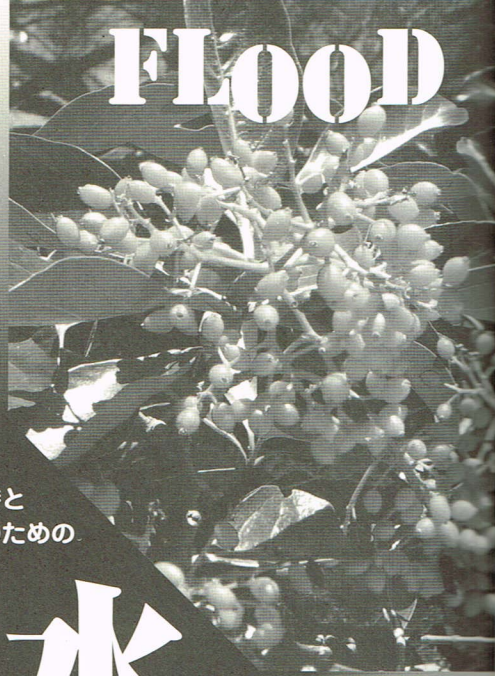
詩で描く新世紀地図 ⑤ ...108

阿部日奈子・撰

新井豊美／古内美也子／長田典子／西元直子

江夏名枝／藤原安紀子／そらしという

FLOOD



詩と
音楽のための

洪水

13号

2014.01

追悼

鈴木 孝 ...107

諸井 誠 ...130

詩人に会う マルク・コベール

連載

嶋岡 晨 詩生活ノート(5) ...122

論&文

神泉 薫

拳玉少年の夢想 ...134

玉城入野

反美学としての犬死に ...138

吉田義昭

「この素晴らしき世界」の一日 ...142

海埜今日子

よしあしの狭間を、月を浮かべた水

の流れる ...146

書評 ...150

北川朱実詩集『ラムネの瓶錆びた炭酸ガスのぼくはつ』（望月苑巳）／新城貞夫著『ささ、一献 火酒を』（野樹かすみ）／日原正彦詩集『冬青空』（南原充士）／坂多瑩子詩集『ジャム煮えよ』（八夏正大）／八寛正大小説集『「シエルター」発』（佐川臣紀）

詩のための〈転〉の論理 ⑫ ...153

雲遊泥泳 ...154

蝦名泰洋／南川優子／津田於斗彦

★洪水企画の最新

〈詩〉

《詩人の遠
はあるけれ
にはなって
セイ・論文
の辺境をお
し、文学の
造本=四六

① ネットエワ紀

池田康 著 80頁
新宿をさまよえ
燃え上がり、ネ
ながる……。表
「気聞日記」も

② 骨の列島

マルク・コベール
208頁／本体180
フランスの詩人
俗を凝視するミ
タが行う一連の
を震撼させる過
録。詩人・有働薫

③ ささ、一献

新城貞夫 著 16
沖縄からうたう
を風に逆らつて
泉」、檄文風エ
ジ」。最近のイ
てアジアへ」を

一続刊予定一

④ 『二十歳の工
ド』の光と影の
國峰照子著

⑤ 永遠の散歩者

南原充士英和对訳
…2014年2月刊行

クノロジがあるという意味で、テクノロジは一つのジャンルとして存在する。しかしテクノロジが存在したために音楽がガラッと変わったかという、それほど変わりはない。
 ハープシコードがなくなつて、ピアノが現れた時に音楽が変わつたり、オーケストラが巨大化して音楽が変わつたりしたという事実はあ

松平頼暁・音楽史の著作のある作曲家

中ザワヒデキ

(美術家)

essay

松平頼暁の講義に潜つたことがある。三十数年前、私が通つていた千葉大学に松平がゲスト講師としてやってきたのだ。「二〇・五世紀の音楽」と題する数回の連続講義で、私は下宿で隣室だった松前公高から誘われ受講した。確か千葉大学の理学部の先生が主宰する音楽史の講座に、当時立教大学の理学部の先生だった松平が前衛作曲家と呼ばれて実現したものであった。私を誘つた松前は当時工学部の学生だったが、すぐにミュージシャンとなり今は『おしりかじり虫』などで知られる。私は当時医学部の学生だったが美術家に転身し、どうでもよいけど全員理系、全員音楽や美術は独学なのだった。近現代音楽を多少聴いていた私にとって、松平先生の話はとても興味深く刺激的だった。たとえばアイヴズやサティに冠される「先駆者」の語は表向きには敬意だが、時代のヘゲモニーを担えなかったことの裏返しという意味では無意識の蔑視であるという話。あるいは画家のデ

クーニングが「あなたが影響を受けた過去の美術家は？」との質問に、「私は過去から影響を受けたのではない。過去に影響するのだ」と答えたという話。

後者のエピソードは後年、拙著『近代美術史テキスト』の序文に使わせてもらったものだが、執筆した一九八九年当時は出典もデ・クーニングという人名も失念していた。というか松平先生の講義でこの話を聴いたのだということに全く思い出せなかつたため、仕方なく「誰の言葉だったかすつかり忘れましたが」という書き出しとした。これが、あのとぎの松平先生の講義だとわかつたのはさらに後年、松平頼暁著『現代音楽のパサージュ（二〇・五世紀の音楽 増補版）』をひもといたときである。そして同書を読むうちに、次の一文、「作曲家が、自分の時代のことを書く時、その時代に深くコミットして来た、というポテンシャルティをもつていることに留意しなければならない」（同書八、九頁）に引かかかった。講義に潜入した学生の時分には、たとえ同じ文句を聴いていたとしても理解できずスルーしていただろう。だがその後

の私なら理解できる。美術史の著作のある美術家として反応できる。

すなわち作曲家が自ら書く同時代音楽史は、単なるお勉強の成果披露や啓蒙などではありえない。直接または間接のすぐれた自作品解説にほかならず、また、そう読まれることが期待されているものでもある。さらにそれは、自身の作曲スタイルの変遷とも密接に関わっているだろう。松平の略歴には年単位での作曲技法の変

遷が記されているが、それは彼が「ほとんどスタイルを変えることなく過ごしてきた」のではなく「目まぐるしく変貌した」タイプの作曲家（同書八頁）であるからだけではない。時代に併走し、時代とともに生きてきたという言い方よりもさらに積極的な意味において、時代の必然を自らに受肉しながら作曲してきたという自負と信念こそが、同時代音楽史と自身のスタイルの変遷史を重ね書きしようとする根拠であろう。いま私は、時代の「必然」と書いた。松平は歴史法則主義者だと私は思う。

そう、歴史には必然があると考える立場が歴史法則主義である。これは創作の場面においては、無用な情緒の切り捨てや整然とした作曲技法、モダンな立ち振る舞いや理系的で小気味よい諧謔性など、松平の全ての作品に通ずる特質に一定の影響を及ぼしていると考えられる。明晰で因数分解のように進んでいく著作の文体にしてもそうだ。文体すなわちスタイルの語義は、鉄筆の意のラテン語 *stilus* を語源とし、書記の際に生じる手癖や手書きの字体が第一義。そこから、その人ならではの文体や手法といった第二義が生じ、さらには個を超えて、その時代の文化や思想態度に特徴的な一定の様式という第三義が生じたらしい。歴史法則主義はこの第三義に一定の必然を認める立場だが、同じスタイルの語で表される第二義や第一義にまでおそらく遡及できる。そして松平が書く音楽史は第三義に、松平個人の作曲は第二義にそれぞれ関わっている。では第一義はどうか。

残念ながら三十数年前の講義で彼が板書し私

(エッセイ) 松平 頼暁 (1948 -)

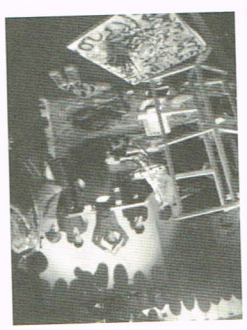
代表作 『松平頼暁の音楽』 (1977)

・『松平頼暁の音楽』 (1977) 『松平頼暁の音楽』 (1977)

『松平頼暁の音楽』 (1977)

『松平頼暁の音楽』 (1977)

『松平頼暁の音楽』 (1977)



松平頼暁さんへは、
essay
大木裕之 (2017)

『松平頼暁の音楽』 (1977)

『松平頼暁の音楽』 (1977)

『松平頼暁の音楽』 (1977)

『松平頼暁の音楽』 (1977)

松平頼暁の音楽 (1977)